様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21　年　6　月　9　日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：18330141
研究課題名（和文）　第一言語としての日本語発達指標の開発と言語発達障害への適用

研究課題名（英文）　Development of a Developmental Index of Japanese and its application to Speech Developmental Disorders

研究代表者
宮田　Susanne（MIYATA　SUSANNE）
愛知淑徳大学・医療福祉学部・教授
研究者番号：40239413

研究成果の概要：1 歳から 5 歳までの日本語を獲得する子どもの縦断発話データに基づき発達指標 DSSJ（Developmental Sentence Scoring for Japanese）を開発し、この日本語の発達指標を 84 人の子どもの横断データ（2 歳ー5 歳）にあてはめ、標準化に向けて調整を行った。DSSJ は WWW 上の CHILDES 国際発話データベースの解析プログラム CLAN の一部として一般公開されている。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	7,800,000	2,340,000	10,140,000
2007 年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
2008 年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
年度			
年度			
総　計	15,300,000	4,590,000	19,890,000

研究分野：言語獲得
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：日本語獲得・言語発達指標・文法獲得・言語障害

１．研究開始当初の背景

英語と比べて日本語の言語発達指標の数はきわめて少ない。標準化されている指標として揚げられるのは「絵画語い発達検査(PVT; 上野・撫尾・飯長 1991)，「Illinois Test of Psycholinguistic Abilities (ITPA)」の日本語版（上野・越智・服部 1993）、そして「MacArthur Communicative Development Inventory (MCDI)」の日本語版（小椋・綿巻 2000）のみである。ITPA を除き主に語彙習得に集中しているので文法発達に焦点を当てる指標が必要である。しかし、以前から日本で使われている平均発話長（MLU; Brown 1993）の標準化された日本語版は存在していない。もう一つの問題点としては、MLU が 3.5（健常児の場合は 3 歳半や 4 歳頃）を超えると MU 値が不安定になり、場面の影響が大きいと指摘されていることがある（Chabon, Kent-Udolf, & Egolf 1982）。

上記の状況を背景に我々は日本語用の言語発達指標（DSSJ）の開発を進めている（Miyata et al. 2003、Otomo 2004、Sirai 2001）。モデルは英語用の「Developmental Sentence Score (DSS)」(Lee 1974)である。DSS は 50 発話のサンプルを分析し、それぞれの文に点数を与える。その点数は 8 領域に渡

り１点から８点まで評価される。日本語版を開発するために７人の子どもの１歳半ー5 歳までの縦断データの解析をもとに「Developmental Sentence Score for Japanese (DSSJ)」を提案した。

２．研究の目的

今回の研究の目的は、Otomo (2004)で提案した 12 文法領域および 99 文法項目に渡る文法項目の改訂を行うことである。そのために、3 歳以降の縦断データを増やし、比較的大人数の横断データを収集することにした。

また、言語発達障害の言語サンプルを DSSJ で解析し、それぞれの特徴がどのように DSSJ で捉えられているかを見ることを第２の目的とした。

さらに DSSJ プログラムに必要な形態素タグを加える形態素解析プログラム（JMOR; Miyata & Naka 2006）の、的中率の高い改訂版を作ることを第３の目的とした。

３．研究の方法

(1) 縦断データ

１歳半ー3 歳まで（3 名;Miyata 2004a,b,c)、1 歳半ー4 歳まで(1 名;国立国語研究所 1981)、3 歳ー5 歳まで（4 名、西澤、未公開）の日本語を獲得する子ども計８名の縦断データを解析し、共通の順序で獲得される文法項目を確認した。3 歳以下のデータは週に１回 40ー60 分、3 歳以上のデータは月に１回 60 分、合計 111,914 発話を解析した。

(2) 横断データ（健常）

２歳８ヶ月ー5 歳２ヶ月までの６ヶ月毎の年齢の子どもそれぞれ 14 名（6 グループ、計 84 名）の最低 20 分（85 発話以上）の親子会話を収集した（合計 16,955 発話）。

(3) 横断データ（言語障害）

3 歳ー8 歳までの PDD, MR または自閉症として診断されている子ども 15 名の自由発話データを解析した。

(4) データ処理

すべてのデータは CHILDES フォーマット（MacWhinney 2000; 宮田・村木・森川 2004; Oshima-Takane, MacWhinney, Sirai, Miyata, Naka 1998）で Wakachi2002 v.3.0（Miyata 2006）の分かち書きガイドラインに従いローマ字化され、JMOR03（Miyata & Naka 2006）によって形態素タグを加えられた。

縦断データに対し MLUm と MLUw（形態素単位および単語単位平均発話長）を計算した。さらに、DSSJ で使用される文法項目の獲得過程を調べるために、それぞれの項目を含む発話を取り出し、項目の生産性を Productivity Level (P-Level, Miyata et al. 2001, 2004) を計った上、獲得順序を Sugiura’s Developmental Order Scaling (SDOS, Sugiura 2004, Sirai & Sugiura 2007）で断定した。この結果をもとに DSSJ の文法項目の見直しを行った。

横断データに対し、MLUm と MLUw、および DSSJ 値（2009 改訂版）を計算した。

(5)プログラム作成

JMOR のバージョンアップを行い、解析されたコーパスをもとに学習機能 POSTTRAIN で訓練させ、解析出力の質を上げた。

４．研究成果

成果として、15 領域で 104 項目を含む DSSJ 改訂版 （v.2009/5/29）を提案した。

横断データの解析結果をまとめると、伝統的に使われている形態素単位平均発話長（MLUm）と本プロジェクトで開発した DSSJ の間に高い相関（0.88）が見られたが、(MLUm の信頼性が下がると言われている年齢３歳半以降では DSSJ との関連が弱まる傾向（3 歳半以下 0.91、3 歳半以上 0.82）が見られ、形態素で計れる文の長さ（MLUm）と、意味的・統語的複雑さを反映した指標（DSSJ）の差が現れている。

障害を持つ子どもの場合も MLUm3.0 以上は個人差が見られ、DSSJ 値が MLUm から予測される値とは異なる場合が多く、DSSJ が MLUm より個人の言語発達状態を的確に捉えていることが示唆される。また、DSSJ で計られているそれぞれの文法領域の値に、健常児のグループよりも強い個人差が見られた。これは、DSSJ の結果が個人の治療の大切な手がかりとなり得ることを示している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 33 件）

(1) Chen, J. & Shirai, Y. (in press). The development of aspectual marking in Mandarin Chinese. *Applied Psycholinguistics*.査読有.

(2) Luk, Z. P. & Shirai, Y. (in press). Review article: Is the acquisition order of grammatical morphemes impervious to L1 knowledge? Evidence from the acquisition of plural –*s*, articles, and possessive *’s*. *Language Learning*. 査読有.

(3) Ozeki, H. & Shirai, Y. (in press). Semantic bias in the acquisition of Japanese relative clauses. *Journal of Child Language*. 査読有.

(4) Shirai, Y. (in press). Semantic bias and morphological regularity in the acquisition of tense-aspect morphology: What is the relation? *Linguistics*. 査読有.

(5) 伊藤恵子・田中真理（2009）「自閉症児の指示詞理解における非言語的手がかりの影響」『児童青年精神医学とその近接領域』

50(1). 1-16. 査読有.
(6) 伊藤恵子（2008）「コーディネーショントレーニングが視知覚能力に及ぼす効果」『臨床発達心理士実践研究』2 巻. 108-115. 査読有.
(7) Miyata, S. (2008). Input Frequency and Case Acquisition in Japanese. 『医療福祉研究』4 号, 108-117.査読無.
(8) Oshima-Takane, Y., Satin, J., & Tint, A. (2008). Rapid word-action mapping in French- and English-speaking children. Proceedings of *32nd Annual Boston University Conference on Language Development*. 347-359. Somerville, MA: Cascadilla Press. 査読有.
(9) 大伴 潔（2008）「言語・コミュニケーション発達の評価と支援」『肢体不自由教育』, 183, 6-11. 査読有.
(10) 大伴 潔・Monica Hirayama（2008）「仮名特殊拍の書字困難への指導に関する予備的研究—音韻意識プログラムによる継時的変化—」『東京学芸大学紀要総合教育科学系』第 59 集. 475-480. 査読無.
(11) Zvaigzne, M., Oshima-Takane, Y., Groleau, P., Nakamura, K., & Genesee, F. (2008). The function of children's iconic co-speech gestures: A study with Japanese-French bilinguals and French monolinguals. Paper presented at the *32nd Annual Boston University Conference on Language Development* (pp. 598-609). Somerville, MA: Cascadilla Press. 査読有.
(12) 日高希美・橋本創一・大伴 潔（2007）「健常幼児と発達障害児の音韻意識の発達過程と文字獲得との関連性について」『東京学芸大学紀要総合教育科学系』第 58 集. 405-413. 査読無.
(13) 伊藤恵子（2007）「アスペルガー障害と高機能自閉性障害における認知特徴の相違—WISC-Ⅲ知能検査結果からの検討—」『言語聴覚研究』4,1. 48-55. 査読有.
(14) Miyata, S., Otomo, K. & Nisisawa, H. Y. (2007). Exploring the Developmental Sentence Score for Japanese (DSSJ): A comparison of DSSJ and MLU on the basis of typically developing and delayed children's spoken language samples.『コミュニケーション障害学』24 巻 2 号, pp. 88-100.査読有.
(15) 大伴 潔（2007）「超低出生体重児の言語発達予後」『周産期医学』, 37(4), 493-495. 査読有.
(16) Ozeki, H. & Shirai, Y. (2007). Does the Noun Phrase Accessibility Hierarchy predict the difficulty order in the acquisition of Japanese relative clauses? *Studies in Second Language Acquisition*, 29, 169-196. 査読有.
(17) Sagae, K., Davis, E., Lavie, E., MacWhinney, B., & Wintner, S. (2007). High-accuracy annotation and parsing of CHILDES transcripts. In *Proceedings of the 45th Meeting of the Association for Computational Linguistics*. Prague: ACL. 査読有.
(18) Shirai, Y. (2007). The aspect hypothesis, the comparative fallacy, and the validity of obligatory context analysis: A reply to Lardiere (2003). *Second Language Research*, 23, 51-64. 査読有.
(19) Shirai, Y. & Ozeki, H. (2007). Introduction. *Studies in Second Language Acquisition*, 29, 155-167. 査読有.
(20) 白井英俊.（2007）「談話と論理: 分節談話表示理論の紹介」『人工知能学会誌』 22(5). 621-629 査読有.
(21) 白井英俊・杉浦正利 (2007) 「時系列データから要素の出現順序の関係 構造を抽出する方法」名古屋大学大学院国際開発研究科『国際開発研究フォー ラム』35. 37-49. 査読無.
(22) Sugaya, N. & Shirai, Y. (2007). The acquisition of progressive and resultative meanings of the imperfective aspect marker by L2 Learners of Japanese: Universals, transfer, or multiple factors? *Studies in Second Language Acquisition*, 29, 1-38. 査読有.
(23) Guerriero, S.A.M., Oshima-Takane, Y., & Kuriyama, Y. (2006) The development of referential choice in English and Japanese: A discourse-pragmatic perspective. *Journal of Child Language 33*, 823-257. 査読有.
(24) 伊藤恵子（2006）「アスペルガー障害の子どもの心理・教育アセスメント事例」『茨城キリスト教大学カウンセリング研究所紀要』24. 25-39. 査読無.
(25) 伊藤恵子（2006）「指示詞コソアの表出からみた高機能自閉症児における語用論的機能の特徴」『コミュニケーション障害学』23. 169-178. 査読有.
(26) 伊藤恵子・田中真理（2006）「自閉症児における指示詞コ・ソ・アの理解と他者視点取得能力および知的能力との関連」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』54. 339-352. 査読無.
(27) 伊藤恵子・田中真理（2006）「高機能自閉性障害の子どもの言語理解における語用論的機能の特性—指示詞コ・ソ・アの理解からの検討—」『発達心理学研究』17,1. 78-85. 査読有.
(28) MacWhinnney, B. (2006). The emer- gence of linguistic form in time. *Connection Science*, 17, 191-211. 査読有.
(29) MacWhinney, B. (2006). Emergentism -- Use Often and With Care. *Applied Linguistics*, 27, 729-740. 査読有.
(30) 宮田 Susanne（2006）CHILDESを使った

日本語教育研究「日本語教育」130 号「特集 : コーパスと日本語教育ー現状と課題ー」52-59.査読有.

(31) 大伴 潔（2006）「母子間言語交渉と言語発達―言語コミュニケーション指導への示唆―」『コミュニケーション障害学』, 23(2), 126-135. 査読有.

(32) 大伴 潔（2006）「障害と言語発達」『心理学評論 』49, 1. 140-152. 査読有.

(33) Shirai, Y. & Miyata, S. (2006). Does past tense marking indicate the acquisition of the concept of temporal displacement in children's cognitive development? *First Language*, 26, 45-66. 査読有.

〔学会発表〕（計 19 件）

(1) 大伴潔・辰巳朝子・宮田 Susanne (2009)「自発話分析による自閉症児の言語発達評価 - DSSJの開発と適用」第 35 回日本コミュニケーション障害学会学術講演会 2009 年 5 月 30-31 日新潟県長岡市。

(2) Guerriero, S.M., Oshima-Takane, Y., Genesee, F., & Hirakawa, M. (2008, July). Preferred argument structure in bilingual acquisition. Paper presented at *XIth International Congress for the Study of Child Language*, Edinburgh.

(3) 平川眞規子（2008）「日本語母語児の英語習得過程における'be'の過剰生成」The 10th Annual International Conference of the Japanese Society of Language Sciences. July, 12-13, 2008. *JSLS2008 Handbook.* 89-92.

(4) Lippeveld, M. & Oshima-Takane, Y. (2008). Do verbal cues facilitate the learning of nouns? Poster presented at the *XVIth International Conference on Infant Studies*, March 2008, Vancouver.

(5) Miyata, S. & Shirai, Y. (2008). Distributional vs. pragmatic effects in argument structure and case acquisition. The 10th Annual International Conference of the Japanese Society of Language Sciences. July, 12-13, 2008. *JSLS2008 Handbook.* 165.

(6) 白井英俊・吉岡美奈・白井純子（2008）ゼロ照応の分析：大人向け文章と子供向け文章の比較」 The 10th Annual International Conference of the Japanese Society of Language Sciences. July, 12-13, 2008. *JSLS2008 Handbook.* 77-80.

(7) 白井純子・佐藤渚・白井英俊.（2008）「4・5 歳児の語る納涼の発達 : 6 歳までに何ができるようになるのか。幼児の作成した絵本資料からの分析」日本認知科学会第 25 回大会、2008 年 9 月 5 日～7 日、同志社大学. pp. 316-317.

(8) 伊藤恵子（2007）「表出言語からみたアスペルガー障害児の対人志向性」平成 19 年 9 月日本特殊教育学会第 45 回大会.

(9) 伊藤恵子（2007）「自閉症児の指示詞理解と話者の視線との関連」平成 19 年 6 月日本コミュニケーション障害学会第 33 回大会.

(10) 伊藤恵子・大島百合子・加山裕子・平川眞規子（2007）「母の言語入力変化の個人差と子どもにおける動詞の項の省略と語彙化のパターン」The 9th Annual International Conference of the Japanese Society of Language Sciences. July, 7-8, 2007. *JSLS2007 Handbook.* 51-54.

(11) Oshima-Takane, Y., Ariyama, J., Katerelos, M., & Poulin-Dubois, D. (2007). Gender effects in word learning. Poster presented at *2007 Biennial meeting of Society for Research in Child Development*, March 2007, Boston.

(12) Oshima-Takane, Y. & Satin, J. (2007). Rapid Word Mapping in 20-month-old French-speaking children. Poster presented at *2007 Biennial meeting of Society for Research in Child Development*, March 2007, Boston.

(13) Sagae, K., Davis, E., Lavie, E., MacWhinney, B., & Wintner, S. (2007). High-accuracy annotation and parsing of CHILDES transcripts. In *Proceedings of the 45th Meeting of the Association for Computational Linguistics*. Prague: ACL.

(14) Shi, R., Oshima-Takane, Y., & Marquis, A. (2007, June). Word-meaning association in early language development. Paper presented at the *2007 TENNET (Theoretical and Experimental Neuropsychology) Conference*, Montreal.

(15) Zvaignze, M. & Oshima-Takane, Y. (2007, June). Iconic gestures associated with nouns and verbs in French-English bilinguals. Poster presented at *the International Conference on Gestures*, Chicago.

(16) 平川眞規子（2006）「英語母語児による日本語の動詞の習得過程について」 カナダ日本語教育振興会 2006 年度年次大会 トロント国際交流基金.

(17) Hirakawa, M. , Oshima-Takane, Y. & Ito, K. 2006. Case markers 'ga' vs. 'o' in child Japanese. The 8th Annual International Conference of the Japanese Society of Language Sciences. June, 10-11, 2006. *JSLS2006 Handbook.* 121-126.

(18) 宮田 Susanne（2006）「幼児語 - 言語のなかの小さな言語」日本発達心理学会第 17 回 2006 年 3 月 20～22 日九州大学箱崎キャンパス. 『日本発達心理学会第 17 回大会発表論文集』 p.253.

(19) 宮田 Susanne（2006）「特別講演：発話データベースCHILDESの概要とその成果」JAECS英語コーパス学会第 28 回大会（北海道大学）2006 年 10 月 7 日.

〔図書〕（計 30 件）

(1) Hirakawa, M., Oshima-Takane, Y. & Ito, K. (in press) . Case omission in early child Japanese. In S. Inagaki et al. (Eds.) , *Studies in Language Sciences* 8, Tokyo: Kurosio.

(2) MacWhinney, B. (in press). A tale of two paradigms. In M. Kail, M. Fayol & M. Hickman (Eds.), *Language studies*. Paris: Springer.

(3) MacWhinney, B. (in press). Emergent fossilization. In Z. Han and T. Odlin (Eds.) *Perspectives on fossilization*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.

(4) Shirai, Y. (in press). Aspect. In P. C. Hogan (Ed.), *The Cambridge encyclopedia of the language sciences.* Cambridge: Cambridge University Press.

(5) Sugaya, N. & Shirai, Y. (in press). Can L2 learners productively use Japanese tense-aspect markers? A usage-based approach. In R. Corrigan, E. Moravcsik, H. Ouali & K. Wheatley (Eds.), *Formulaic language: Volume 2. Acquisition, loss, psychological reality, functional applications.* Amsterdam: John Benjamins.

(6) Takane, Y., Jung, S., and Oshima-Takane, Y. (in press). Multidimensional scaling. In R. E. Millsap and A. Maydeu-Olivares (Eds.), *Handbook of quantitative methods in psychology.* London: Sage.

(7) Shirai, Y. (2009). Temporality in first and second language acquisition. In W. Klein & P.Li (Eds.), *The expression of time* (pp. 167-193). Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

(8) 伊藤恵子（2009）『発達の課題と障害』東京未来大学.

(9) Yap, F-H., Yiu, E, Chu, P. Wong, S., Kwan, S., Matthews, S., Tan, L-H., Li, P., & Shirai, Y. (2009). Aspectual asymmetries in the mental representation of events: Role of lexical and grammatical aspect. *Memory & Cognition 37* (5), 587-595.

(10) 伊藤恵子（2008）『自閉症児の語用論的能力に関する実証的研究』風間書房.

(11) 伊藤恵子（2008）『精神保健学』 東京未来大学.

(12) MacWhinney, B. (2008). Enriching CHILDES for morphosyntactic analysis. In H. Behrens (Ed.), *Corpora in language acquisition research: History, method, perspectives* (pp. 165-197). Amsterdam: John Benjamins.

(13) MacWhinney, B. (2008). How mental models encode embodied linguistic perspectives. In Klatzky, R., MacWhinney, B., and Behrmann, M. (Eds.) *Embodied Cognition* (pp. 365-405). Lawrence Erlbaum.

(14) Kikuchi, R. & Sirai, H. (2007). Analysis of Context-Dependent Interpretation of Noun Phrases. In H. Sirai et al. (Eds.) *Studies in Language Sciences 6* (pp. 259-276). Tokyo: Kurosio.

(15) MacWhinney, B. (2007). Opening up video databases to collaborative commentary. In R. Goldman, R. Pea, B. Barron & S. Derry (Eds.), *Video Research in the Learning Sciences.* Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.

(16) MacWhinney, B. (2007). The TalkBank Project. In J. C. Beal, K. P. Corrigan & H. L. Moisl (Eds.), *Creating and Digitizing Language Corpora: Synchronic Databases, Vol.1*. . Houndmills, Basingstoke, Hampshire: Palgrave-Macmillan.

(17) Ozeki, H. & Shirai, Y. (2007a). The acquisition of Japanese noun- modifying clauses: A comparison with Korean. In N. McGloin & J. Mori (Eds.), *Japanese/Korean Linguistics 15* (pp. 263-274). Stanford, CA: CSLI Publications.

(18) Ozeki, H. & Shirai, Y. (2007b). The consequences of variation in the acquisition of relative clauses: An analysis of longitudinal production data from five Japanese children. In Y. Matsumoto, D. Oshima, O. W. Robinson & P. Sells (Eds), *Diversity in language: Perspectives and implications* (pp. 243-270). Stanford, CA: CSLI Publications.

(19) 白井恭弘（2007）「言語習得・発達」佐々木Yap, F. H., Inoue, Y., Shirai, Y., Matthews, S., Wong, Y. W., & Chan, Y. H. (2006). Aspectual asymmetries in Japanese: Evidence from a reaction-time study. In T. Vance & K. Jones (Ed.) *Japanese/Korean Linguistics 14* (pp. 113-124). Stanford, CA: CSLI Publications.

(20) Shirai, Y. (Ed). (2007). The acquisition of relative clauses and the Noun Phrase Accessibility Hierarchy: A universal of SLA? *Special Issue of Studies in Second Language Acquisition*. Cambridge: Cambridge UP.

(21) Sirai, H. Arita, S., Hirakawa, M., Inagaki, S., Minami, M., Oshima-Takane, Y., Shirai, Y. & Terao, Y. (Eds.) (2007). *Studies in Language Sciences 6*. Tokyo: Kurosio. 319 pages.

(22) Hirakawa, M. (2006). More Evidence on the knowledge of unaccusativity in L2 Japanese. In Sorace, A. , S. Unsworth, M. Young-Scholten and T. Parodi (eds.) *Paths of Development in L1 and L2 Acquisition* (pp. 161-186). John Benjamins.

(23) Hirakawa, M. (2006). ‘Passive’ unaccusative errors in L2 English revisited. In R. Slabakova, S.A. Montrul and P. Prevost (Eds.), *Inquiries in Linguistic Development* (pp. 17-39). John Benjamins.

(24) Miyata, S., Hirakawa, M., Kanagy, R., Kuriyama, Y., MacWhinney, B., Minami, M., Murakami, K., Nisisawa, H. Y., Oshima-Takane, Y., Otomo, K., Shirahata, T., Sirai, H., Shirai, J., Shirai, Y., Sugiura, M., & Terada, H. (2006). The Development of the CHILDES-Based Language Developmental Score for Japanese (DSSJ). In: M. Minami, H. Kobayashi, M. Nakayama & H. Sirai (Eds.), *Studies in Language Sciences 5* (pp.75-89) Tokyo: Kurosio.
(25) Nakayama, M., Mazuka, R. & Shirai, Y. (Eds.) (2006). *Handbook of East Asian psycholinguistics: Vol. 2, Japanese.* Cambridge: Cambridge UP. 428 pages.
(26) Nakayama, M., Shirai, Y., & Mazuka, R. (2006). Introduction. In M. Nakayama, R. Mazuka, & Y. Shirai (Eds.), *Handbook of East Asian psycholinguistics: Volume 2, Japanese* (pp. 1-10). Cambridge: Cambridge UP.
(27) Nishi, Y. & Shirai, Y. (2006). Rethinking temporal approach to stativity denoted by -teiru: The application of the two-component theory of aspect. In T. Vance & K. Jones (Ed.), *Japanese/Korean Linguistics* 14. (pp.113-124). Stanford, CA: CSLI Publications.
(28) Oshima-Takane, Y. (2006). Acquisition of nouns and verbs in Japanese. In: Nakayama, M., Mazuka, R., Shirai, Y. & Li, P. (Eds.). *Handbook of Japanese Psycholinguistics* (pp.56-61). Cambridge: Cambridge UP.
(29) Shirai, Y. (2006).The acquisition of tense-aspect. In M. Nakayama, R. Mazuka, & Y. Shirai (Eds.) H*andbook of East Asian psycholinguistics: Volume 2, Japanese* (pp. 82-88). Cambridge: Cambridge UP.
(30) 白井恭弘（2006）「第二言語習得論と習得モデル」.迫田久美子・松見伸夫（編）『講座日本語教育（3）言語学習と心理』東京：スリーエーネットワーク. 44-59.

〔その他〕
(1) DSSJ は　WWW 上の CHILDES 国際発話データベース（MacWhinney, 2000）の解析プログラム CLAN の一部として一般公開されている（http://childes.psy.cmu.edu/clan/）。
(2) JMOR04 は同じく CHILDES の一部として一般公開されている（http://childes.psy.cmu.edu/morgrams/ja.zip）。

６．研究組織
(1)研究代表者
宮田　Susanne（MIYATA　SUSANNE）
愛知淑徳大学・医療福祉学部・教授
研究者番号：40239413

(2)研究分担者
伊藤　恵子
東京未来大学・こども心理学部・准教授
研究者番号：80326991

大伴 潔
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：30213789

白井 英俊
中京大学・情報理工学部・教授
研究者番号：10134462

杉浦 正利
名古屋大学・大学院国際開発研究科・教授
研究者番号：80216308

平川 眞規子
東京国際大学・国際関係学部・教授
研究者番号：60275807

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
MACWHINNEY, Brian
Carnegie Mellon University (Pittsburgh, USA), Department of Psychology, Professor

OSHIMA-TAKANE, Yuriko
McGill University (Montreal, Canada), Department of Psychology, Professor

SHIRAI, Yasuhiro
University of Pittsburgh (Pittsburgh, USA), Department of Linguistics, Professor

村木恭子
名古屋大学大学院国際開発研究科

西澤弘行
常磐大学・人間科学部・准教授

辰巳朝子
島田寮育センター

椿田ジェシカ
愛知淑徳大学・文化創造学部・講師
（2008 年 3 月まで）